

# 研究主題 新学習指導要領における「指導と評価の一体化」を目指して －「言語活動」に着目した評価のあり方－

研究部

## はじめに

本校では、中学校の新学習指導要領が平成 24 年度から完全実施になることを踏まえ、平成 21、22 年度の学校研究は、「新学習指導要領の実施に向けて」を主題に研究実践を進めてきた。

平成 21 年度は「習得・活用を意図した授業のあり方」を副題に、学習活動における基礎的・基本的な知識・技能の習得とその活用について、大学の先生の助言を仰ぎながら、教科等ごとに授業の実践を中心に研究を行った。

平成 22 年度は「言語に関する能力の育成を意図した取り組み」を副題に、前年度研究の成果や課題を踏まえた上で、学習活動における生徒の言語活動の充実について、教科等ごとに授業の実践を中心とした研究を行った。

## 1. 平成 23 年度研究について

平成 23 年度の研究は、「新学習指導要領の実施に向けて」を主題とした平成 21、22 年度の研究を踏まえた上で、前年、平成 22 年度の研究成果と課題を踏まえ、より実践に寄り添った研究を行うことをめざした。先に平成 22 年度の研究について簡単にまとめておく。

### (1) 研究の経緯（平成 22 年度研究の概要）

「言語活動」の充実については、新学習指導要領（第 1 章，第 1，1）に

〔前略〕生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、生徒の発達段階を考慮して、生徒の「言語活動」を充実する〔後略〕

と示されたように、各教科等の学習活動はもちろん、学校の教育活動全体における大きな課題である。

平成 22 年度の研究では、同じく新学習指導要領（第 1 章，第 4，2，(1)）に示された、

各教科等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習を重視するとともに、言語に関する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の「言語活動」を充実すること。

を拠り所に、言語に関する能力の育成を意図した学習活動を各教科等において計画・実践した。

研究活動を進めるにあたっては、まず新学習指導要領に示された「言語に関する能力」について、そこに至る経緯を確認し、さらにその位置付けと内容について整頓と確認を行った。すなわち、

- 新学習指導要領で示された「生きる力」という理念は、それまでの学習指導要領と大きく変わるものではない。「生きる力」を支える「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健やかな身体」の調和は、学校教育における柱である。
- 「確かな学力」については、「学習意欲（主体的に学習に取り組む態度）」「基礎的・基本的な知識及び技能の習得」、「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表

現力等」，という3項目にまとめられる。

- 知識・技能を習得する活動も，思考し，判断し，表現する活用の活動も，すべて言語で行われるものであり，これらの学習活動の基盤になるのは言語に関する能力である<sup>1</sup>。
- 各教科等における学習活動においては，学習活動の基盤となる「言語に関する能力の育成」が重要であり，その特質に応じて言語環境を整え，「言語活動」の充実を図ることが求められる<sup>2</sup>。

図1は，学校教育ではぐくむことが求められているさまざまな力を整頓し，言語に関する能力の位置づけを確認したものである。

こうした整頓，確認を踏まえ，各教科等で計画・実践の取り組みを始めたが，研究を進めるにあたってすぐに浮上したのは，「言語活動」といってもその内容は非常に幅広く，学校全体の研究として取り組むためには，より具体的な方向性が必要ではないかという問題点であった。学習指導要領とその解説書には，「言語活動」として「記録」，「要約」，「説明」，「論述」といった言葉が取り上げられ，その他にも各教科等に示された記載には「討論」，「発表」，「批評」，「意見」，「説得」，「解説」，「報告」，「紹介」など，さまざまな言葉が「言語活動」として記載されている。そこで，

学校研究として各教科等が共通して取り上げる具体的な「言語活動」して「説明」に焦点を当て，学習活動における「説明」の場面や，その活動のあり方について研究を進めることにした。

取り組みの当初は，説明をする側の行為だけに注目し，行為のプロセスを「受信→思考→発信」と捉えていた。二者間でやりとりをする場合は，双方で「説明」という言語活動を「発信」し合うというイメージであった。しかし各教科等で実践を進める中で，よりよい説明が行われるためには，説明する側の「表現する力」だけではなく，説明を受ける側の「理解する力」も重要であることが明らかになってきた。すなわち，言語に関する能力の育成を意図した活動は，単に言葉を聞き，話し，書き，読む能力をはぐくむだけに止まらず，互いの立場や考えを尊重しながら「伝え合う力」をはぐくむことが大切ということである。そして「伝え合う力」をはぐくむためには，学習活動において，言葉を聞き，話し，書き，読む能力を活用して，「自分の考えを言葉で説明し，伝え合う言語活動」を意図的に構築することが重要である。

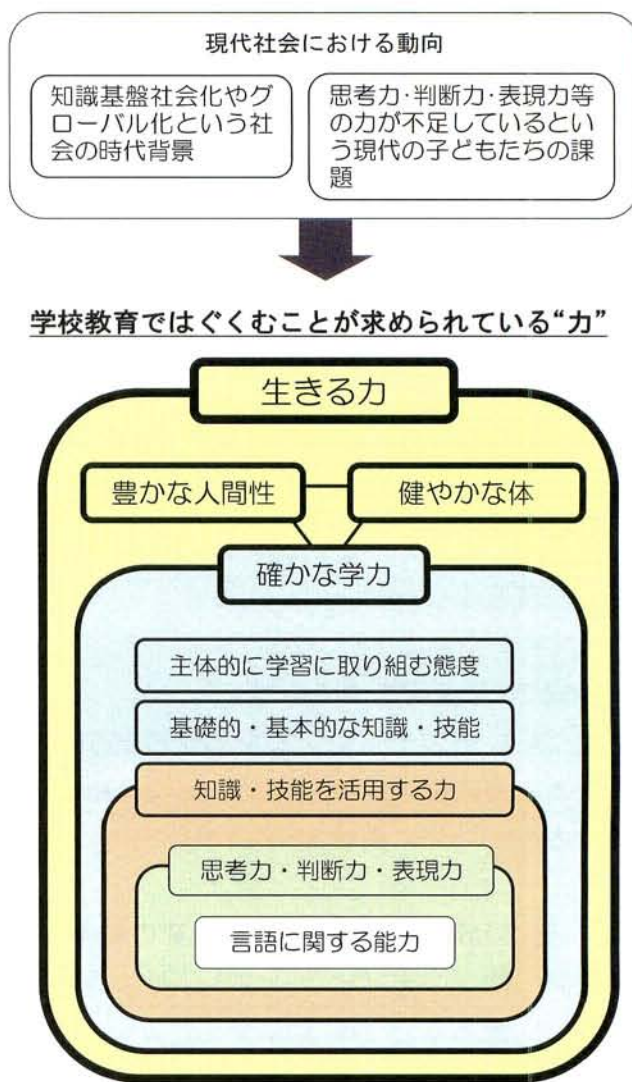


図1 言語に関する能力の位置づけ

<sup>1</sup> 文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編(平成20年7月)』第3章，第5節，1。

<sup>2</sup> 文部科学省『中学校学習指導要領(平成20年3月告示)』，第1章，第4，2，(1)

## (2) 研究の方向性

「言語に関する能力の育成」に焦点を当てた平成 22 年度の研究では、各教科等から「言語活動」の形態や内容についての具体的な実践報告やその成果、課題について提案を行うことができた。しかし当然ながら、そこでの主たる「言語活動」の目的は、言語に関する能力の育成を念頭に置いたもので、各教科等の学習目標と「言語活動」との関連が不明瞭という課題が生じた。実際に「言語に関する能力の育成は各教科等の学習活動なのか?」、「言語活動についての評価はどうすればよいのか?」、「言語に関する能力の育成を意図した新たな学習活動を提案しなくてもよいのか?」といった声も聞こえ、少なからず疑問や混乱があった。こうした混乱は、今回の学習指導要領が示されて以来、多くの教育現場で見られたことであったように思われる。

各教科等の学習活動をはじめ、学校の教育活動全体において「言語に関する能力」の育成を図ることは大きな課題であり、実際に「言語活動」の充実によって「言語に関する能力」の育成が実現できることは間違いないが、そのこと自体が目的なのではない。「言語に関する能力」はさまざまな学習活動の基盤であり、その育成の目的は、あくまでも基礎的・基本的な知識・技能を活用するのに必要な「思考力・判断力・表現力」の育成である。

平成 23 年度の研究の方向を決めるにあたっては、そうした課題を踏まえ、最初に「言語活動」は学習活動における“手段”であるという位置づけを示した。その上で、「言語活動」という手段を用いた学習活動によって各教科等の学習目標の実現を図ること、その学習活動のあり方を実践研究するという方向性を明確にした。さらに、その実践を検証するための方法として「評価」に焦点を当て、「言語活動」によって子どもたちの学びがどのように「変容」していくのかを、「評価」によって探ることを研究の中心に据えることにした。以上の方向性から、各教科等に以下の確認を行った。

### ● 言語活動について

- 各教科等における学習活動で行う「言語活動」は、「言語に関する能力の育成」を主のねらいとするものではない。各教科等の学習活動における、「学習のねらい（目標）」をよりよく実現するための手段（学習の形態）である。
- 学校全体の研究として共通した方向性を持つために、学習活動における「言語活動」を計画する際には、平成 22 年度の研究成果を踏まえ、「自分の考えを言葉で説明し、伝え合う言語活動」の形態を基本にして計画、実践する。平成 22 年度の研究成果を元に作成した図（次ページ、図 3）を参考にする。

## 求められる力を育むための“学習活動”

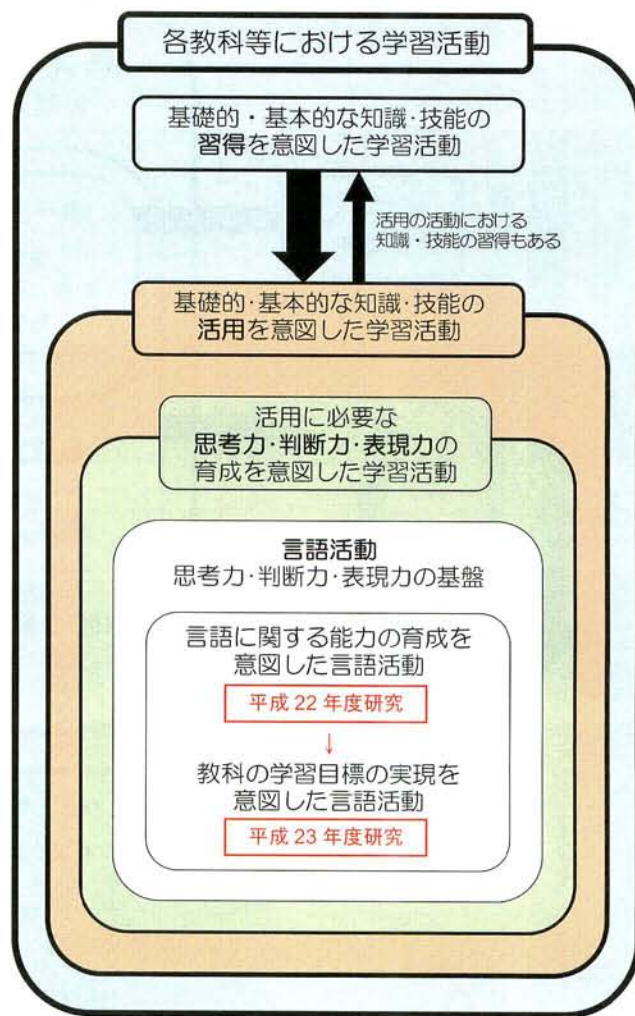
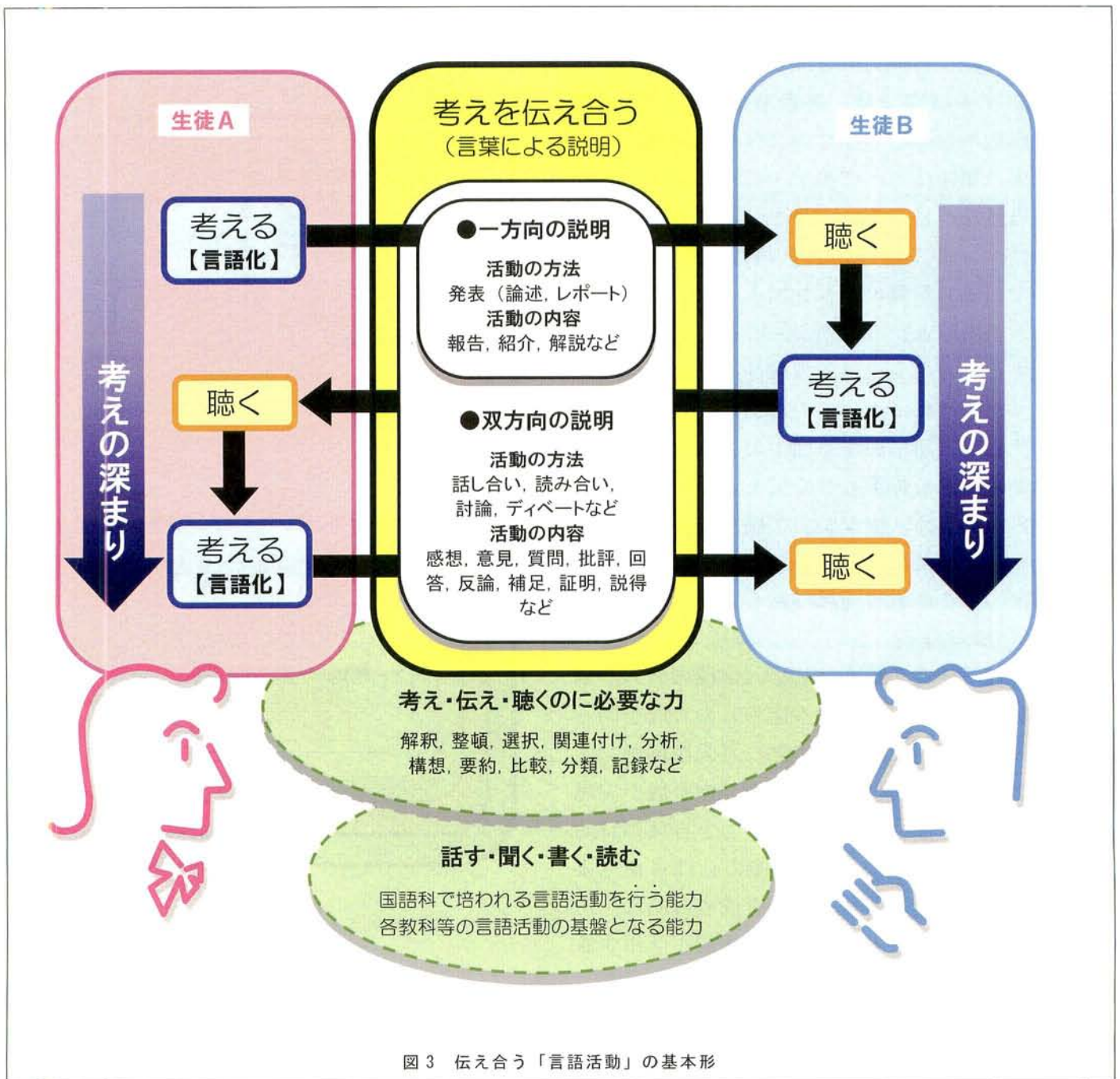


図 2 学習活動における言語活動の位置づけ



- 「言語活動」は各教科等の学習活動のすべての場面で取り組めるものではない。「言語活動」を行うことを目的とした新たな学習活動を構築することが目的ではない。学習活動における「言語活動」を計画する際には、①これまでに行ってきた学習活動を「言語活動」の視点で捉えなおし整頓すること、②新たに学習活動を計画する際、意図的、積極的に「言語活動」を手段として設定すること、の2つの視点で行う。

● 評価について

- 各教科等の学習活動において行われる「言語活動」、例えば発表や話し合いなどの活動では、当然、話す・聞く・書く・読むといった「言語活動」が行われるが、話し方・聞き方・書き方・読み方といった「言語活動を行う能力」については評価する必要はない。あくまでも「言語活動」という手段を通して、各教科等の学習目標（学習のねらい）がどのように達成できているかについて評価を行う。ただし国語科においては「言語に関する能力の育成」そのものが教科

の学習目標であり、話す、聞く、書く、読むといった「言語活動を行う能力」の育成を「言語活動」によって行うことになる。

- 研究の対象となる「評価」は、授業を中心とした学習活動の過程で行う「形成的評価」である。実践する「言語活動」を通して生徒の学びがどのように深まり、変容したかを見取る「評価」の方法や、その「評価」をどのように指導に生かしていくかについて、具体的な実践研究を通してまとめていく。

## 2. 各教科の実践の概略

前述の研究の経緯と方向性を踏まえた後、各教科等ではそれぞれ以下のように研究テーマを設定し、実際に取り組んだ。

国語科	伝え合う力を高める言語活動と評価の工夫
社会科	多面的、多角的に考察する力をはぐくむ言語活動の工夫
数学科	筋道を立てて説明する力の評価
理科	科学的に説明する力を育成するための評価
音楽科	よりよい音楽表現をするための言語活動とその評価
美術科	教科の目標を実現する手段としての言語活動　－イメージを豊かに感じ取り、表現する手立て－
保健体育科	言語活動を活かした授業を目指して　－伝え合い学びあう生徒を目指して－
技術・家庭科	言語活動を意識した授業づくりとその評価
英語科	生徒にとって効果的で分かりやすい評価をめざして
学校保健	言語活動を意識した指導とその評価　－保健室経営計画から考える－

そのくわしい内容については本紀要における各教科の報告を参照していただきたいが、概要については以下のようなものであった。

### ● 国語科

書く能力は高い生徒の状況から、「伝える力」の中でも「話すこと・聞くこと」を中心に、3学年のそれぞれで段階的に研究を進めた。

1年生は思いや考えが書かれたものをもとに、分かりやすく伝える「話し方」を意識したグループディスカッションを行った。2年生は相手の立場や考えを尊重して話を聞くことに着目し、相手を受け入れるような、相手が話しやすくなるような「聞き方」を意識してインタビューを行った。3年生は「話すこと」に焦点を当て、敬語を適切に使うことなど、場の状況や相手の様子に応じた「話し方」を意識して、電話での応対の場面を想定して話す活動を行った。

評価の方法としては、視聴覚機器を用いて活動を録音、録画し、生徒自身が振り返りや自己評価、相互評価に活用するとともに、教師の評価の補助手段として活用する試みを行った。

### ● 社会科

社会的事象を「多面的・多角的に思考する力」をはぐくむという観点から、思考を「社会的事象を地理的、歴史的、政治的、経済的、社会的、法的などさまざまな枠組み（視点）からとらえている」、「社会的事象をさまざまな社会的関係（立場）に立って見ている」という2つの側面からとらえ、その思考のパターンや、伝え合う言語活動の形態を考察した。

実践では、生徒がグループによる意見交換や発表、ディベートなどの言語活動を行う際に、自分の考えを分かりやすく伝えるための論理的思考の手立てとして「ツールミンモデル」に着目した。さ

らにツールミンモデルの「D（データ）、C（結論）、W（理由付け）、B（裏付け）」によって思考を可視化することで、生徒自身や教師の評価の手立てとしても活用する試みを行った。

### ● 数学科

筋道を立てて説明する力に焦点を当て、学習活動における生徒の説明を「直感的な説明、類推的な説明、帰納的な説明、演繹的な説明」の4つの型からとらえ、評価のあり方を探った。

各学年の発達段階に応じて、「伝え合う活動」を行い、その際「数学的な見方や考え方」の観点から、考え方や説明の方法を生徒と共有し、確認した。

それぞれの場面における生徒の考え方や説明を見取る際には、「ループリック」を用いた評価を行い、支援や発問を行った。

### ● 理科

科学的に説明をする場面として、観察・実験後の考察を行う場面に特に重点を置いて指導を行った。観察・実験のレポートを書く際に「考察の型」を示し、これまで教師側のみの評価だったものを、平成23年度は教師と同様の基準を生徒にも示し、自己評価を行わせた。

生徒自身に評価させることで、学習を行う前と後に書いたものの内容の変化を生徒自身が見ることができ、何が身につき、何が分からないのかを確認できると同時に、生徒と教師の評価のずれを指導に活かすことができた。

### ● 音楽科

主に創作と鑑賞の活動での言語活動において、自分が感じたよさや美しさ、思いや意図を伝えるための取り組みとして、表現のための創意工夫をグループで行い、発表する活動や、既習したことを出し合い、自分たちで工夫し話し合う活動を行った。

話し合いの際には、教師の言葉による働きかけによって生徒の意識がどのように変容したかを、ワークシートを中心に見取った。

### ● 美術科

表現活動において、意図したイメージを表現するために創意工夫した技法や表現効果をグループで発表、意見交換し、自分になかった他者の視点や考えに気づき、取り入れる試みを行った。

分かりやすい説明をするためには、用いる語彙の理解と共有が必要であると考え、事前の学習をまとめたものを用いて説明することや、制作の途中で気付いたり閃いたりしたことを作品周囲の余白やワークシートに書き留めるようにした。それを見ながら発表や意見交換を行うとともに、教師がその変容を見取り、適宜発問や知識・技能の支援を行う評価を行った。

### ● 保健体育科

グループでお互いに活動を見合い、課題解決に近付くためのポイントを確認し合う「伝え合う活動」を行った。その際、①技のポイントの資料提示、②見つけたポイントのキーワード化、③見るポイントの焦点化の3つを置き、さらにHSカメラで撮影した動画を使うことによって、自分の考えをより明確に表しやすくなり、聞き手側も理解しやすくなり、より効率のよい伝え合いができると考えた。

教師はワークシートの記録はもちろん、授業中の生徒の会話や声かけにも意識を向け、聞き取るように心がけ、言葉や表現に対するよい評価を、次の時間に共有することを心がけた。

### ● 技術・家庭科

基礎的・基本的な知識・技能を実際の生活の中で「工夫し創造する能力」が言語活動によってどの程度生徒に獲得されたかを、過程を重視した評価によって明らかにしたいと考えた。

一連の活動の流れがわかるようなワークシートを用意し、「なぜそうするのか」、「よりよい方法は

何か」など、「何のために（目的）」、「何をどんな風にどうするのか（過程）」という問題解決的な思考の流れを明確にした上で、体感をもって理解することを重視し、自分が当事者になってその理解を他者に伝え、意見を共有する活動の場を設定した。

#### ● 英語科

個々の話し方や発音についての形成的評価が不十分であった反省を踏まえ、形成的評価を授業にもっと取り入れる改善策を模索した。

生徒に「リアルな文脈において、知識やスキルを統合して使いこなすことを求める」パフォーマンスに関する一連の課題、活動、テストなどの設定と、パフォーマンスの量と質の向上を図るための自己評価や他者評価、そのためのルーブリック（評価指標）の明確化など、これまでの実践を踏まえ、生徒への評価の還元方法について実践研究を行った。

#### ● 学校保健

前年度研究で明らかになった、「子ども自身が自己の心身を表現する言語活動（説明）」における生徒の自己評価と養護教諭の評価の差と、その差を縮めるために、生徒が教師に何を伝えなければならないかを知識として理解するための評価を踏まえ、教師が理解してあげる一方ではなく、生徒の力を計画的につけていくために、保健室経営計画に健康教育の指導・評価を導入する試みを行った。

### 3. 研究成果と課題

平成 23 年度の研究実践においては、各教科等でそれぞれの学習目標のよりよい実現に向けた指導を、学習活動における言語活動という手段に焦点を当てて考えてきた。さらにその言語活動の「評価」のあり方について実践研究を行うことで、子どもたちの学びが深まり、指導が改善されることを期待した。実際に各教科等においては、形成的評価を意図的に行うことで、子どもたちに何らかの形で変容が見て取れることが成果として明らかになっている。

しかし研究を進める中で、さらに整頓や理解の共有が必要なことが明らかになってきた。

- ・形成的評価ではあるが、活動の場面単位での評価の方法はABCといった基準を用いたものが多く、総括的評価や評定との関連にまだ多少の混乱が見られる。
- ・言語活動の形態は数量的に評価をしにくいものが多く、評価基準が具体的なものであっても、評価は難しい。今後、パフォーマンス活動や、その評価指標（ルーブリック）についての研修、理解や実践が求められる。
- ・言語活動における「考える」場面について、その思考や判断の行われ方について、分析、整理した上で、その共有が必要。
- ・評価によって子どもたちがどのように変容したかを、より明確に検証する方法とその実践が必要
- ・評価を子どもたちの学びの深化や授業の改善に結びつけるフィードバックの方法について、さらに研究が必要。

「指導と評価の一体化」については、2000年12月の教育課程審議会答申に、「学校の教育活動は、計画、実践、評価という一連の活動が繰り返されながら、生徒のよりよい成長を目指した指導が展開されている。指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要であり、これがいわゆる「指導と評価の一体化」である」と記されている。

今後も、評価が生徒の学習の改善に生かされることが重要であり、生徒の学習の到達度を適切に評価し、その評価を指導に生かすことが重要である。

# 研究同人

校長 鷺山 靖

副校長 松原敏治

教諭 黒川陸郎 (国語) 教諭 鏡千佳子 (音楽)

〃 端名秀雄 (国語) 〃 西澤 明 (美術)

〃 岡崎和美 (国語) 〃 北 恵子 (保体)

〃 寺田康彦 (社会) 〃 廣瀬尋理 (保体)

〃 坂井宏行 (社会) 〃 中村正寛 (技・家)

〃 上谷知未 (社会) 〃 橋本正恵 (技・家)

〃 浜口国彦 (数学) 〃 山岸律子 (英語)

〃 戸水吉信 (数学) 〃 齊藤亜希子 (英語)

〃 三浦幸生 (数学) 〃 端崎圭一 (英語)

〃 廣谷玲江 (理科) 養護教諭 杉本千津

〃 兵地 梓 (理科)

〃 西野秀子 (理科)

平成23年度までの研究同人

校長 松原道男

教諭 辰巳 豊 (理科)